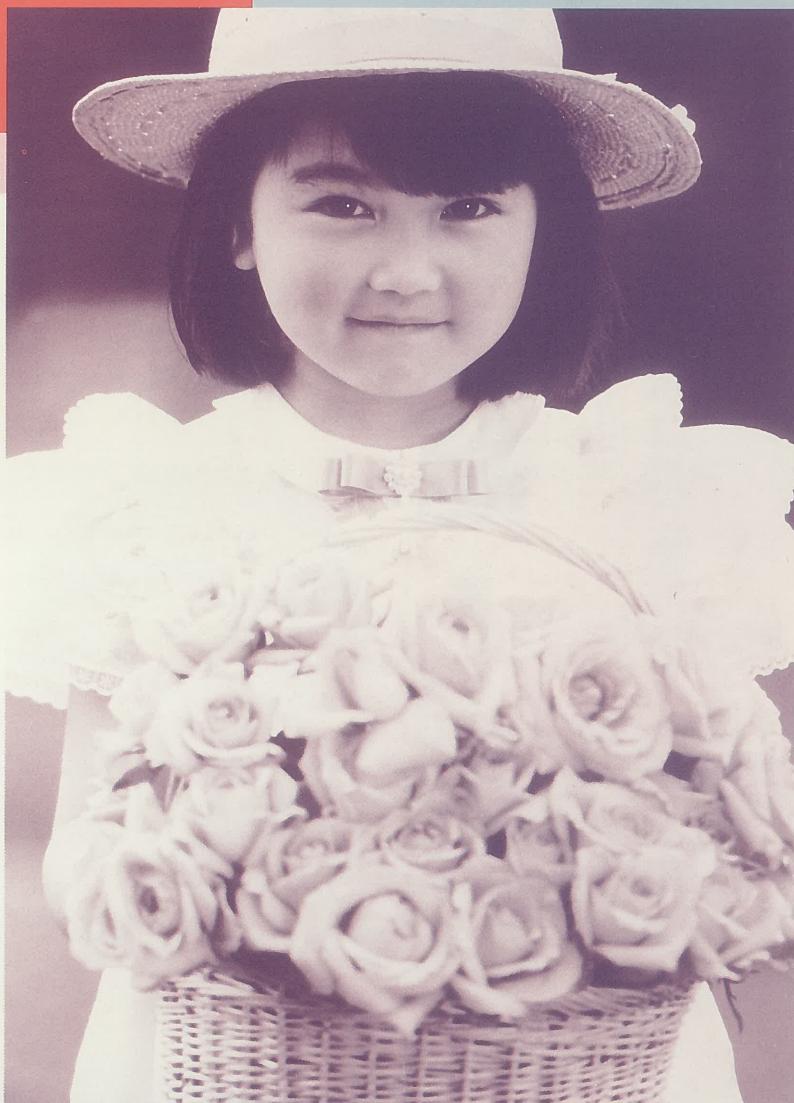


子供たちの明るい未来のために語り継ぎます

# 私の戦争 体験

第17集

平和学習資料  
夏の班長会 班会



被爆・終戦50周年記念特集

いすみ

1995年6月

# 戦争中は地獄そのもの

泉南市 紀川 栄

昭和二十年六月一日朝から米軍の空襲は熾烈を極め、私たちの住んでいる大阪市港区は殆んど焼野原になりました。

主人は昭和十七年、召集を受け千島列島に駐屯し不在でした。

家には、三日前に脳卒中で倒れ半身不随となつた父と、母、私の三人で住んでいました。お隣の人がもう逃げないと危ない、一緒に逃げないと誘ってくれましたが、不隨の父をかかえているので、母と思案しました。家の入り口に焼夷弾が雨のように落ちてきたので決心し、母は父を背負い、私は頭にかぶる布団とリュックサックをかついで、母を援助しながら逃げました。

やっと疎開後の盛土をしたところまで来ましたが、轟音とともに戦闘機が低空射撃を始めましたので、三人はその場で布団をかぶつて伏せました。どれ程経ったでしょうか、気がついたら頭にかぶっていた布団もズキンも吹きどんではありませんでした。母は頭に負傷をしており、父は半身にやけどをしておりました。とりあえず、私は帯をとい

て母の頭にぐるぐる巻に巻き、どうしようもなく呆然としていました。そのうち、隣組の人人が探しにきてくださり、町内の人々が集まっている所へ連れて行つてくれました。私たちの町内は一軒も残らず焼けて、たくさんの犠牲者が出していました。後で聞いた話ですが、私たちが逃げて上がれたかった盛土の上では、空襲の後、龍巻が起きて、隣組の赤ちゃんを連れられた人は気がついた時には、赤ちゃんが遠くへ飛ばされていたとのことでした。翌日、西宮に住んでいた従兄弟が迎えにきてくれました。父をリヤカーに乗せ、野田阪神まで雨に濡れながら歩き、西宮の予備に借りてあった家へいきました。空襲の後は真黒い雨が降ります。顔も体も真黒になって西宮へ行って十日目、父はやけどが悪化して亡くなりました。でも家があつただけ幸せでした。少しの間でも父の世話をすることができました。その後、毎日の空襲警報におびやかされながら、今日も何とか生きていたねと母と言いくつとう日々でした。

父の四十九日が過ぎて間なしの八月五日、西宮

に空襲がありました。母と海の方へ向かって逃げました。途中、大きな土管が横たわっていたので、中に入りかけたのですが、先客が入っていました。

仕方なく布団を頭に野原まで、ひっきりなしに落ちてくる焼夷弾を避けながら逃げましたが、ズシンと私の身体すれすれに腰にあたって焼夷弾が落下しました。立ち上がり座り込んでしまいました。「しつかりせい」と母はいいながら襟上をつかんで引き起こしてくれたので、やっと立ち上がりましたが、腰が痛くて歩けませんでした。

長時間かかってやっと海まで来ました。被ついた布団は、焼夷弾の大きな穴があいて火を吹いていたので、海へつけました。その布団のお陰で何とか軽い怪我で助かったんだと思います。薬もなく、少し手に入れたメリケン粉を酢でねって患部に当てる手当しましたが、約一ヶ月歩けませんでした。

西宮の家もすっかり焼けてしまい、野天の生活が始まり、夜は野天に吊った蚊帳に隣組の人たちとゴロ寝しました。

やっと八月十五日、終戦になりました。

その内、福知山線の相野のお百姓さんの一室を借りて住みましたが、着のみ着のまま、道具も何もなくてみかん箱のお膳で食事をしました。二回も焼け出されたので、主人とも連絡もつかず、毎日西宮の駅へ復員してくる主人を迎えて行きました。幸い戦友の奥様と文通していましたので、主

人は戦友の家へ寄り、所在を知つて無事帰つて参りました。終戦後は食糧を求めて主人と農村、山へと随分買い出しに行きました。

その後四十年、共に苦労した母も十五年前に亡くなり、戦後生まれた子どもも成人し、結婚して現在は主人と二人、幸せな余生を送っています。港区に住んでいたため、ジェーン台風、第二室戸台風と二回も水害にあり、家も軒先まで浸かって逃げました。後始末が大変でした。このたびの北海道奥尻島の地震、水害による被害者のつらさを身にしみて感じます。元気を出して早く立ち直つてほしいと思います。

地獄極楽この世にあるならば、戦争中は全くの地獄そのもの。山あり谷ありの生活でしたが、つらい過去があつたから現在の幸せが極楽そのものと感謝の生活をしています。どんなことがあっても戦争はしてはいけません。被害を受けるのは國民です。子孫に私たちと同じ思いをさせたくないません。

# 昭和から平成になつても忘れてはならないこと

堺市 谷 文代

六月の中旬、再会を約していた高女時代の親友のご主人から、「妻が病重く、とても貴女に会いたがっている」と電話をいただき、急いで主人と見舞つたが、昏睡の状態であった。手を握れば暖かく、白髪まじりではあるが髪も多く女学生時代の面影があつた。

このままではどうする思いで一週間後見舞つた時、ベッドに座つて気分もいいとのことだった。会つた途端タイムトンネルを通つて、お互い旧姓で呼び合い胸がつまつた。

友の記憶は動員で機銃弾をつくる旋盤を操作したり、農作業したり、夜の空襲警報で真暗な中、砂浜の防空壕にかけ込んだり、親元を離れ宿泊生活を送つていた戦時下の苦しい青春の思い出を堰を切つたように話し出した。大阪湾でドーンという大きい音がするたびに、触雷で船がこなぐる音だと聞いた。大豆の沢山入ったご飯に、大根葉の味噌汁、魚の煮付と献立もくり返しだったが、食事にありつけただけ幸せだった。

艦砲射撃に備えての避難訓練をかね、近くの河

口へ出かけたこともあり、河口に生えていた青のりを家への土産にと採つたのを想い出す。飽食の今、想えば栄養不足だったけど精神的な緊張もあって、病氣もなく「生きる」目的でがんばつたようだ。でも考える事を忘れた一時期であったように思います。

戦争の責任は誰にあったのか？ と主人と話しますが、主人も特別幹部候補生に志願して出征し、マスコミ、いや世界の指導者、死の商人なのでしようか。

私の家族四人も、長女の私は動員で宿舎に、妹は学童疎開に、父は四十歳を過ぎて召集令状を受け、一家はバラバラになりました。

終戦の翌日、迎えにきてくれた母と浜辺を歩き、海水着もなかったので、素っ裸で思う存分泳いだことを覚えています。海は静かで、きれいでした。「戦争が終わってよかったです。助かった」と思いました。以後学校に戻り、戦後の苦しい時代を超えて、強い女になったのかもと思っています。

昭和が終わらなければ戦中戦後は終わらないと

思つていましたが、平成の世になつても、忘れてはならないと、孫にも話すつもりでいます。

七夕の前日、友は動員宿舎の前庭に咲いていた真っ赤な「夾竹桃」、「共に過ごした動員生活」沢

## 堺大空襲のもとで

堺市 炭野 栄子

私の家はその当時、堺市北向陽町の十三間道路を挟んで運送業をしておりました。

あの頃主人は現役を終えて家業に励んでおりました。義兄（主人の姉の主人）は、私たちが結婚する一年程前に召集令状がきて軍隊にとられました。私が長女を生んだ年、軍隊から帰つてきました。私はなんと立派な体格のお人だなあと思つていました。

時すでに戦争が日に日に激しくなつていき、大阪が空襲を受けた日、敵機は大阪へ向かって行く途中で焼夷弾をバラバラと落とし、私の家の車庫へ落ちたのですが、無事で、続いて建つていた物置と民家が焼けましたが、それで終わりました。車庫が鉄骨だったからでしょう、近くの人たちは

それを知り、沢山の人たちの道具などを頼まれ、車庫は一杯でした。

それから空襲は日に日に激しくなり、ついに運命の日がきました。昭和二十年七月九日、夕飯を早くすませ、黒い布を電気のホヤの上からかぶせて光を戸外に出さないようにしているので、どこを歩いてもドス暗いものでした。その時、空襲警報が出されたのでみんな防空壕の中へ入りました。しばらくすると空襲警報解除の放送があつたので、やれやれと思ってそこを出て、背中の子どもを下ろし寝床に入れて寝かしたと思っていると、また空襲警報。敵機襲来の放送があり、あわてて子どもをおんぶし、そこにあった白い毛糸のマントを頭にかぶせて防空壕へ入りました。入る時、ふと

北を向くと家並が大きく燃えていました。その火を見ながら防空壕へ入った時、今度こそ、焼けると思いました。

しばらくすると、ゴウーゴウーとすさまじい物音が近づき、両手で耳をおさえていると、私の家の南隣の家の屋根の中ほどへ落ちました。その落ちた瞬間、真っ赤な火柱が燃え上がり、見る見るうちに火の海のようになりました。火はたいへんな火の粉を出して、それが防空壕の中へ飛んでくるのです。一生懸命に濡れタオルを持って消していました。こんなところにいるところまで火気で燃えてしまうような気がして、そこを出ることにして、近くの中日橋を渡って東側の広い空地にいくことにしました。

ところがすでにその橋は逃げる人でいっぱいです。一步も動けないです。うしろの大きな家から火の粉がたくさん飛んできて、その熱さにやられると思い、あともどりして川の中を渡ることにしました。どぶ川で汚いが水が少ないので、向こう岸へ這い上がるにしました。長女は七歳で心配していましたが、思いの外早く岸へ上がれました。私は背中の子どもが重たいので少し上ると足がはずれ難儀しました。子どもがお母さんといって、手をつかんで引き上げてくれました。やっとどうにか東側へ上がることができました。おばあちゃんも上がってきました。おじいちゃんは手足が弱いので、壕にも入らず、どこにいたのか目が煙

でやられ、長いあいだ目医者へ世話をになりました。その朝、私の弟と妹が自転車できてくれました。一面の焼け野原に変わり果てたところを、苦労しきれました。それから私も子ども二人を連れて里へ帰っていました。里の家には姉も子ども二人を連れて帰っていました。一週間程すると、親戚の人気が兄さんが死んだから帰ってほしいといって迎えにきました。思えば兄さんもお氣の毒な方です。戦争のはじめ頃に召集され、三年あまり戦地で暮らして、復員後は家の仕事をして、立派に暮らしていたのに、敵の爆弾にあたり、一週間ほどで、金岡の騎兵隊の兵舎で亡くなりました。

私の主人もあの頃ニューギニアへいくことが決まっていたそうですが、先発隊が何度も海の途中で撃ち落とされるので、これでは殺されにくようなものだといつて中止になったと、帰ってきてから話していました。姉の主人もあの地で戦死したそうです。送ってきた遺骨箱にリンゴ一個が入っていたと話していました。

どんなに日本が強くなつても戦争なんかしないように、平和な暮らしのできる日本であることをお祈り致します。

## 失うものばかりの戦争

貝塚市 田口 三貴

空襲警報が鳴りました。

昭和二十年、堺市市之町に住んでいました。私は満四歳位だったと思います。ほんの子どもでしたので記憶があいまいな所もありますが、恐ろしかった体験は今でも鮮明に思い出されます。ウワーワーと鳴り響くサイレンの音とともに「空襲警報発令」と大きな声が、声が聞こえました。

私は八人兄弟の末っ子で、その頃、父は満州に長男は中国に行っていましたので、家には母と兄弟七人の八人がおりました。

兄達は起きなさい起きなさいと言われてもなかなか起きなかつたように思います。母は姉と私の手を握りしめて近くの防空壕に入りました。

その中はもうすでに何人かの人気がおりました。しばらくすると、「この中も危ない！ 早く外に出ろ」と、大きな声が聞こえました。防空壕の出口は火の粉がいっぱいでした。

とにかく外に出ようと無我夢中で出口の方へかけ出しました。

周りはすでに火の海です。つかれはてた見知ら

ぬ人が私の姉の肩に寄りそって、姉はしばらくの間、身動きがどれなくなっていたような記憶がありました。

早く防空壕から道に出たいのに、出口がトタンでふさがっています。恐ろしさのあまり姉と同時に「竹屋のおっちゃん、助けて！」と叫んでいました。家の向かいが竹屋さんでとても可愛がつてくださっていたから、無意識にそのおじさんに助けを求めていたと思います。そのおじさんが火の中をむしろを水にぬらしてかぶり、私たちのところにきてくださったのです。そして出口をふさいでいたトタンを蹴りとばしてくださったので、私たちは道に出ることができました。

先程姉につかまっていた人が、出口のところに深い溝があったのですが、そこにはまって亡くなっているのを見ました。

とにかくその時は、自分が逃げるのが、精一杯でしたから……。

しばらく歩き家の前までくると、二番目の兄が大きなおひつ（お米を入れてあった）を持って「お

母ちゃん、こっちこっち」と呼んでいます。その時です。上空から焼夷弾があちらこちらに落とされてきました。

私たちの頭上にも焼夷弾が。「あっ」と思った瞬間三人とも転んでしまいました。その時、母と私の足の上に焼夷弾が落ちたのです。

私の左足の足袋が燃えています。兄は即座に私は抱きかかえ足袋を脱がせてくれました。私は兄のおかげで助かりましたが、母の足は大やけどを負いました。

それから大小路のところへ行きましたが、川は焼夷弾のため火の海です。とにかく橋の下まで行きました。そこにはすでに大勢の人が集まっています。橋の下にも燃え移ってきたので、兄は一生懸命に川の水（焼夷弾が落とされて、お湯になっていた）をかけては燃え移ったところを消していました。

焼夷弾のため火の海です。とにかく橋の下まで行きました。そこにはすでに大勢の人が集まっています。橋の下にも燃え移ったところを消していました。

あまりの熱さに喉が渴いたのでしょうか「水がほしい」と叫んでいました。するとどなたかが「ここにあります」と大きな声で返事をしながら水筒のお茶を渡してくれました。

やがて空襲は終わりました。ばらばらに逃げていた兄弟は、どこをどうたどって助かったのか、あちらこちらから橋の下に集まってきた。「よく生きていたね」親子で抱き合いながら喜んでいたことが思い出されます。

辺りは焼け野原、私たちの家もなくなっていました。

## 日本の勝利を信じていたあの頃

堺市 矢田 正美

私は昭和九年、住吉区（現住之江区）安立町で生まれました。終戦の昭和二十年は小学六年で、あまり厳しい戦争体験はありませんが、自分の戦争中の生活を記録しておく気持ちで思いだすまま書いてみました。

太平洋戦争が始まったのが小学二年、既に日中戦争は泥沼化していて、従兄弟の一人は中国大陆で戦死しておりました。

太平洋戦争が始まつたのが小学二年、既に日中戦争は泥沼化していて、従兄弟の一人は中国大陆で戦死しておりました。

家は食料品店で木津卸売市場へ仕入れに行っても、慢性的な品不足で、闇取引、売り惜しみとかの言葉がよく聞かれました。

こんにゃくなど、たまにオート三輪で入荷するど、鍋を持った多くの人が殺到し、あつという間に売り切れました。

昭和十七年頃になると、殆どの食品が統制になりました。父は配給所に勤めるようになり、収入は落ち込み家計は苦しくなりました。

その上隣組を通じて戦時債券の購入が半強制的に行われ、両親が苦しんでいました。

住吉区では、かなりの畠も残っていて、農家の

人がさつま芋を掘っていると、芋のつるを貰おうと沢山の人が並んで待っているのです。学校も社会も神がかり的な軍国主義の風潮が強まってきて、登下校時は奉安殿（昭和天皇の写真が祀られた）の前で最敬礼をさせられました。

六年生の男子が同年の女子に綱引きで負け、寒風下の運動場で正座させられていきました。

女子の方が少し多かつたらしいが、そんな事は問題にならず、「日本男子が女風情（おんなふぜい）に負けるとは恥を知れ」と言う事らしいのです。阪堺線の電車が住吉大社の停留所で止まるとき、車掌が「住吉大社です。武運長久を……」と乗客に挙手を指示しました。

満蒙開拓青少年義勇隊の宣伝映画が学校で上映され、兄が応募したいと云つたが、両親が反対したと戦後になってから聞きました。安立小学校から一人だけ義勇隊に応募し、学校と町会あげての、壮途を祝う大パレードが行われました。

昭和十九年、五年の時、学童疎開が始まり、田舎に親戚等があれば縁故疎開、なければ学校单位で集団疎開する事になりました。私は二年の妹と

しました。

それから私たち家族は、とぼとぼと歩き始めました。あちらこちら、亡くなられた人の死体をながめながら……。

やがて母の伯父を頼り「狭山」にひとまず落ち着きました。

当時、四歳の幼かった私の脳裏にいやな、あの戦争の体験が焼きついで離れません。

多くの人の命を奪い、生活を壊した戦争、失うものばかりの戦争、ああ、二度とこのような思いをするのはいやだ！

私はいつも「戦争反対」と大声で叫び続けています。

私はいつも「戦争反対」と大声で叫び続けています。

がめながら……。

やがて母の伯父を頼り「狭山」にひとまず落ち着きました。

私はいつも「戦争反対」と大声で叫び続けています。

私はいつも「戦争反対」と大声で叫び続けています。

母の里の富田林町（現富田林市）西板持に疎開しました。始めは田舎の生活も楽しかったのですが、少しずつ親が恋しくなってきました。実直な伯父は私を一人前の百姓に仕込む気持ちで、戦時下の事、たいへんに厳しかったです。母が商売で忙しく、甘い祖母に育てられた私はきつかったのです。土曜日になると、ちょいちょい住吉に帰るのですが、日曜日になって富田林に戻るのがつらく、足取りも重かったです。

ある日、阿倍野橋駅で切符発売中止（当時は日々あつた）になったと云って、家に帰ろうかと妹に話すと妹は小さくうなずきました。翌月曜日、早起きがすむかすまないうちに、又発売中止になると、いけないと、早く早くと母にせきたてられました。食料事情が益々悪くなり、富田林にも大阪から多くの人が買出しに来ました。「供出にだして何も無い」と伯父が云うと、立派な男の人が「昨日から何も食べていない。夕食の残りでも何でも食べさせてください」と哀願し、世辞を云いながらお粥の残りを食べて帰っていました。「町の人間は乞食のようだ」と田舎の人々のひそひそ話が聞かれました。

二十年三月十日の東京大空襲に続き、三月十三日の深夜、大阪にも大空襲がありました。サーチライトに照らされたB29が、大編隊を組んで焼夷弾を次から次へと落としていくのが、富田林からもはっきり見えました。大阪の夜空が真赤に焼け、

燃えさかる火の下に地獄図があったのです。市内の中心部が一夜にして焼け野原になりました。家の五軒隣にも焼夷弾が落ち半焼したが、私の家は幸い焼け残りました。それでも私も学校の先生も、ほとんどの人が日本の勝利を信じて疑いませんでした。

二十年八月十五日。私は夏休みで家に帰っていました。正午のラジオを聞いて、両親も私も話の意味が分からなかつたが、隣の伯父さんが、日本は負けたんだ、と飛び込んで来ました。十五日夜、日本の男は全員奴隸になるとかデマも飛びいました。

敗戦の混乱も少し落ち着いた五日ほど後、そうだ戦争は終わったのだ、もう疎開する事はないのだと思付いたのです。大声で「万歳。万歳」と叫びたくなりました。家の物干し台から見た八月の大空は、抜けるように青かったのをおぼえていました。

敗戦すぐ、床屋で大人たちの戦争責任の追及が始まっていました。東条が悪い、軍が悪いともちがひたくなりました。家の物干し台から見た八月の大空は、抜けるように青かったのをおぼえていました。

戦後すぐ、床屋で大人たちの戦争責任の追及が始まっています。東条が悪い、軍が悪いともちがひたくなりました。しかし戦時中の最高責任者の名前が、見事に欠如していたのです。

## 十五歳で挺身隊に

堺市 井上 幸代

私は現在六十五歳昭和四年生まれです。今から、五十年前、私が十五歳の頃に東京で挺身隊に志願しました。

板橋の工場に行き、毎日池袋まで歩いて、都電に乗り小石川区役所前で下車して、近くのビルの地下に工業学校が有りました。そこで、飛行機の部品を旋盤で作っていました。

ある日、空襲が来て防空壕の中に避難をしました。入口で見ていると、B29が十機ほど飛んで来て、日本の飛行機が後から飛んで来て、上方に上がったと思ったら、B29に体当たりしました。日本の飛行機はすぐにめらめらと墜落してしまい、おちた下から燃え上がって、体当たりされたB29はおしゃから煙を出しながらまだ落ちもせず飛んでいました。まるで映画を見ている様でした。又若者が亡くなっていたのです。

東京も危なくなり、私達六人ほどでしたが、堺木県に疎開をしました。疎開をして十日目ぐらいに板橋の女子寮が空襲にあり、私達はあぶない所で難をのがれました。

もう戦争はいやです。絶対にあの時のくるしさは忘れません。私の義兄も戦死しました。残された老人、女、子供達ばかり、心細い思いをしました。

# 病院で遭つた大阪大空襲

泉南市 竹 幸子

ザアー、ゴォーと大きな音。一瞬、何が起こったのかわかりませんでした。ぱっと部屋の中が明るくなりました。窓にかけよって外を見ると焼夷弾の雨が降っていました。

大阪大空襲の夜、私は木綿橋の外科病院三階の病室に居りました。不安な気持ちでした。そこでも大丸も燃え出しました。ここは病院だから大丈夫かも知れないと思いました。様子を見に屋上にいた兄が病院も燃え出したから逃げようと言いました。「まだ居たのですか、早く逃げて下さい」と看護婦さんの声です。四ッ橋で交通事故にあった妹が、この病院に運ばれてきて二週間目のことで左足を失った十六歳の妹を兄が背負いました。

母は非常袋を肩にかけ、五年生の弟と手をつなぎました。姉と私はふとん一枚ずつ持ち、ドアを開けると煙がわーーと入ってきて何も見えません。看護婦さんの声をたよりに、新館への吊橋を渡りました。あせる気持ちをおさえて、時で手すりを確認しながら降りました。兄は旧館の階段を降りました。

左足を失つた十六歳の妹を兄が背負いました。母は非常袋を肩にかけ、五年生の弟と手をつなぎました。姉と私はふとん一枚ずつ持ち、ドアを開けると煙がわーーと入ってきて何も見えません。看護婦さんの声をたよりに、新館への吊橋を渡りました。あせる気持ちをおさえて、時で手すりを確認しながら降りました。兄は旧館の階段を降りました。木造船が燃え出しました。

「病人や、入れてやれ」と誰かの声に、まわりの人達が少しずつ下さり、妹をねかせることが出来ました。

兄と姉が家を見にゆきました。病院から北へ十五分程、今の勒公園の南端あたりになります。やはり丸焼けでした。まだ燃えていたそうです。近

ました。這つている人が居たけれど手助けをすることができませんでした。

所の人達は学校に避難されて皆さん無事のことでした。私は弟と倉庫の入口で立ったり、しゃがみこんだりして過ごしました。困ったのはトイレです。何も食べていないので行きたくなりますが、まわりは赤々と燃えていて、かくれる処などありません。

もう夜が明けてもいいと思うのに暗やみです。燃えている黒い煙が空をおおっていたのだと思いります。昼か夜かわからない、そして何が起こるかわからない不安な時間が過ぎてゆきました。兄の会社の方が見舞いに来て下さいました。貴重なお米をいただいたのですが、釜も水もなく食べる事などできません。

雨がしどと降り出しました。すすぐまじっているのでしょうか黒い雨です。病院では上げき用に大掃除に使うわらぞうりをはいていました。そのまま逃げたものですから雨が降り出すと足元が濡れました。しどとの雨ではなかなか火は消えませんが、それでも少しずつ下火になりました。長い長い時間がすぎてゆきました。

雨が止んだのは、たしか三月十五日だったと思ひます。先生が入院患者の応急手当に回って下さいました。こんな状態だから皆それ他の病院に移ってほしょになりました。兄は煙で眼が見えなくなっていましたが、看護婦さんに洗つてくださいて少しそくなりました。病院のトイレが使えると聞いて行きました。病室にローソクがゆら

ゆらしています。よく見るとベットの上は真黒コゲの人でした。

兄が勤務先の社長さんに相談に行きました。梅田まで歩けば阪急電車は動いています。次の日、大八車を借りて兄が帰ってきました。わらぞうりがすり切れたとかでトイレではなくようなく駄をはいていました。私達は十三の寮に入れて頂くことになったのです。

出発の朝は強い風が吹いていました。ふとんも飛んでゆく勢いに、繩でしっかりしばりました。戴いたお米もしばりつけました。着のみ着のまま、わらぞうりで逃げた私達は、これで全部なのだと思いました。涙がこみあげそうになった時、呼ぶ声にありむくと奈良県に疎開していた母の妹夫婦でした。おにぎりを一ぱい持つててくれたのです。この時程きずなの強さを感じたことはありません。気がつくと焼け出されてからこの朝まで食べることも、飲むことも忘れていたのでした。

このあと世の中の冷たい風に吹きさらされたり、見も知らずの人に助けられたりしました。あれから五十年の月日が流れ、現在私は六十八歳です。戦争は思い出したくないのですが、決して忘れることはありません。

## 焼け跡で

着るものもなく、食べるのも乏しい終戦最初の冬は殊のほか寒い気がしました。

この頃、本町三丁目市電の通りから二、三本北へ寄った焼け残りの小さなビルで私は働いていました。電気も水道もなく、机を五、六脚置いていただけの事務所です。私は邦文タイプストとして採用されたのですが機械などありません。それで雑用のようなことをしていました。

あたり一面焼野原ですが、ぼつんぼつんと鉄筋の建物が残っていました。そんな中に道端に水の出ているところがあり、湯呑を洗いに行きました。横をトラックがあり、しばらくするとドスンッ、ドスンッと大きな音がします。びっくりして顔をあげると、焼け残ったビルの階段が真正面に見え、大きなものが転がり落ちました。よく見

ると胡坐をかき膝をかかえるようにしてうなだれている男の子です。そのあとから男の人が二人降りてきて、もう一蹴りでトラックのそばまで運び、二人でほいと荷台にほうりあげ、何事もなかったようにトラックは出てゆきました。後から見る荷台の中は人形のようになった死人で一ぱいでした。

私の体はわなわなふるえ、足が硬直して動くことが出来ませんでした。弟より少し大きい位のあの男の子は、両親と離れてしまい食べるのもなく一人で寒さに堪えていたのかと思うと可愛そうで涙があふれました。

今でもあの時の情景が眼に焼きついています。

## 小学校卒業から高女入学の頃

泉大津市 平田 満喜子

一九四五年四月、私は大阪府立の高等女学校に入学した。

小学校では固い校庭の土を掘り起こして畑にしたり、軍服のボタン付けをしたりしていて、またもな授業はほとんどなかった。それでも女学校や

そのサイレンが鳴ると下校することになっていたので皆学校から出された。試験は翌日に延期されることになった。駆に着くと空襲警報が出され電車もとまってしまった。

翌日また学校へ行ったが同じことがくり返され、

遂に試験は中止、全員合格となつた。従つて一年生は定員の二倍以上にふくれ上り、玉石混淆のやりにくい学年だと先生方に言われ続け、それが終戦後学制改革で高校になり、そこを卒業する六年後にまで続くことになった。

入学しても上級生達は工場へ強制労働に行っていて、月に一回ぐらい学校に来るだけ。毎日学校へ行く私達にしても、ほとんど連日の空襲で登校と同時に下校になることも多かった。下校になつても電車もとまっているので、五キロほどの道を歩いて帰る事になる。同じ方向に帰る人達とかたまつて歩いていて艦載機に機銃掃射され、あわてて田の中へ転げ落ちたりもした。

服装はセーラー服にモンペ、モンペの上から脚絆をつけた。髪は切ると罰せられるので三つ編にして両側にたらした。自由が許されるのは脚絆だけなので、おしゃれな人達はその形に変化をつけ楽しんでいた。

そのうち一年生も働きに行くことになり、今のみさき公園へ芋畠を作りに行くことになった。芋からは飛行機の燃料が作られるのだと聞かされていた。広々とした丘陵地帯で初夏の風を受けて働く

くのは気持ちよかったです。つきそいの教師が何のためにか、軍人になぐられているのをたびたび見かけて恐ろしかった。芋の収穫期を待たず終戦になつたので、秋にはその芋は生徒全員にわけ与えられた。

学校生活でもう一つ記憶から消せないのは、弁当と靴はいつも持ち歩いていたこと。トイレに行く時も弁当は友人に託した。ちよつと油断するとお腹をすかした同級生に食べられてしまうから。特に農家の子の白い飯は狙われた。しかしその頃の弁当泥棒のいいところは全部食べてしまふではなく、半分は残してあった事。空腹はお互いまと骨身にこたえていたせいだろうか。弁当と貴重な靴の持ち歩きは終戦後もしばらくは続いた。

私は中学校に行くには入学試験があるとのことで、進学希望者は残つて勉強をしました。受験の日が来て電車で三駅ほど南の学校へ行つた。しかし席に着いてまだテスト用紙も配られぬうちに警戒警報のサイレンが鳴りひびいた。当時

## 壊した防空壕

美原町 松本 作枝

昭和二十年八月十五日。その日は夏の暑さが照りつけていました。

天皇陛下の玉音があるので近所の人達や父と共に西宮の駅（今のJR）へ聞きに行きました。駅から流れる玉音の声は、私には内容がよく判りませんでしたが、帰り道みんなが日本は無条件降伏をしたらしいと云う事でした。これから日本はどうなるのであろう、米軍が上陸して来たら女のは危ないのでないか、みんな家の中に閉じこもり、外には出られないのではないか等、話しながら家に帰ってきました。

父はすぐに、作りかけの防空壕を壊してしまいました。

広島や長崎に原子爆弾が落とされ、八月五日の晩は西宮も最後の大空襲を受けました。たくさん的人が焼夷弾に当たったり、建物の下敷きになつて焼け死んだり、火にまかれて亡くなったりで、翌朝は死骸がごろごろしていました。その死骸を集め、学校の運動場に溝を掘り、その中に並べて焼いたと云う事です。夜は空襲警報もなくなり、

電気を点けて休む事が出来て皆んなほっとして喜んでいたものです。

毎日毎日の警戒警報、空襲警報、それに艦載機に襲撃され、毎日が何時死ぬか判らない生活でした。私達子供も体操の時間は薙刀の稽古でした。その様な事は原子爆弾を落とされれば何の役にもたたないのですが、日本の勝利を信じて一生懸命稽古をしたものです。

戦後、特攻隊で散った若い人達や、戦地で死んでいった人たちのことを写真で見たり聞いたり、又はテレビ等で見たりする度に心が痛みます。その人達の尊い犠牲に対しても、今生きている私達はよりよく生きて行かなければならないと思っております。

## 兄の出征

岸和田市 披村 益子

早くも五十余年経ちました。戦場体験者の多くすでに逝き、あるいは老いて、戦争は遠い日の出来事として風化しつつあります。

昭和十五年十二月、私の家の門にも『祝い出征』の旗が立ちました。やっと息子（兄）もお国の為に役立つ日が来たら、母は喜んでいました。でも其の陰にはそつと涙をふいていました。ああ忘れる事の出来ない三月六日、兄は祖国を後にして、中国大陸へと、雄々しく旅立つて行きました。十時、大阪築港の広場で肉親、其の他の人々と別れを惜しんでいました。午後四時頃、輸送船の人になりました。船は岸壁を離れ、水平線の彼方へと消えて行くまで皆は見送っていました。何人の人が生還された事でしょう。

昭和十六年十二月、大東亜戦争に突入しました。戦局はますます激しくなってきました。物資もだんだんと不足して苦しい毎日でした。銃後の守りが堅ければかならず勝利するものと信じていました。窓は黒い幕でおおい、電球も下の部分だけ白く、其の他の黒く、家中は薄黒い

状態でした。光が外に出ない様にとの事でした。パーマネントも廃止、長袖はだめ、着流しはだめ、モンペ姿でちびた下駄でした。

竹槍や、薙刀の稽古の毎日でした。水でバケツリレー、竹の先に数本の縄を付けて火たたきもしました。何の役にも立ちませんでした。

学徒動員されて軍事産業に励んでおりました。其の頃、月月火水木金金の生活がつづいておりました。英靈の家、出征の家と、入口にかかげて大事にされていました。

それから一年半程経ちました時、みしらぬ人が、兄の風呂敷を持って家に見えました。びっくりしました。

兄は負傷して陸軍病院との事で再会が出来ました。五体は揃っていましたが、胸を悪くしていました。でも会えてよかったです。これからの若い人々には、二度と此の様な体験をしない時代であります様に。

## 機銃掃射

八尾市 畑中 知永子

当時、私は旧制高等女学校を卒業、附属していた専攻科に通っていた。五年制の女学校であったが、戦争が厳しくなり、国家の方針で一年短縮、四年で卒業させられた。『螢の光』で送られるところなく、『海ゆかば』の合唱の卒業式であった。二年先輩は鈴鹿、一年先輩は母の軍需工場に学徒動員として働いていたが、私達は学校全体が被服工場に変身、南方へ派遣の陸軍の兵隊さんの上下服縫製作業に通学していた。

その日の朝、登校前から空襲警報が発令され、鉄道も動かないで学校へ行けず、私は家でミシンがけをしていた。何を縫っていたかは記憶していないが、当時衣類は国からの配給制度で自由に買うことが出来ず、通学服のモンペ上下は勿論、肌着下着や足袋なども有りあわせの布で縫わなければならなかつた。鉄道が動けば出勤しなければならない父も、すぐ出かけられるように門口を出たり入ったり落ち着きなくうろついていた。空襲警報とはいっても、都会でない私達の町は……といった気楽さがまだあった。

と突然、ウウウウウー、バリバリバリ、カラカラカラという音がすぐに落ちたような音。何事が起きたのかわからず、父や母のいるところへ「何や、えらい音やな」と走りよつたら、また、ウワウー、バリバリバリ。様子を見に二階にかけのぼった母が「こわい！ アメリカの飛行機や。二階へつづこんでくる。兵隊がこわい顔してにうんどる」と階段をかけ降りてきた。どうしてよいかわからない父と私は、上りかまちのかげにつくばつた。母と妹は押入の前で。その間にも敵機の音が絶えまなく聞こえる。機銃掃射である。母がやっと押入から出してくれたふとんを父と頭からかぶついた。三回、四回……はじめは数えてはいたものの、二十何回ともなれば“神様、はやくやめて”と念じるばかりであった。

私の住んでいた奈良県の町は、そんなに大きくはないが交通の分岐点であり、機関区があった。つまり鉄道の要所にあたるわけである。駅の南側が小高い丘つづきで、小型の飛行機は丘の上からぐっと高度を下げ、駆けがけて機関銃をうち、北

側にある私の家の方をめがけ機首をあげ急上昇、その時に銃の殻を捨てるのが家の屋根瓦に落ちてカラカラと音をたてる。これを何回も繰り返すのである。急なでき事で防空壕に入る隙もなかつた。飛行機が去つたあと、ほんにまあ命があつたのだ、助かったのだと親子四人、ふとんの上にすわりこんだ。

外へ出てみると駅の方で煙が上がつている。「火事や」父と私はバケツを持って消防の手伝いに走つた。数軒の駅前の店や旅館が燃えていた。あとで聞いた話であるが、待合室で列車を待つておられた方々は警報のため退去するよう言われ、二、三人が駅前の家の軒下に避難しておられたところを機関銃で撃たれ、亡くなられたそうである。その中にお腹の大きい方もおられ、赤ちゃんもだめだったということであった。

それからも一、三回、同じような敵機襲来があった。私は学校へ行つていた時で、母と妹ははやくから防空壕へ入つていたが、外へ出たら家も焼けてないかもしけんなあと身をよせあつていたそつである。

今でも雷鳴を聞くと当時を思い出すし、打ち上げ花火のシュルシュルとなる音は焼夷弾の落ちるようであまりいい気持ちではない。